

年に平安京が作られたとき、それは最も純粋な意味での首都であることを意味していました。すなわち、政治の中心地、天皇と貴族の家と儀式の中心地、そして官僚行政、外交を促進する中心地でした。都において寺院と神社は除外され、武士の存在は原則としてタブーでした。殺生や埋葬も汚染の原因とされ公的に禁止されました。京都が9世紀初頭からの密集した開発地区に囲まれるようになったのは、これらの自慢の（まったく非現実的ではあるが）都市の理想のためでした。これらの洛外の飛び地内では、寺院のコミュニティと居住者は、都の固有の振る舞いの厳格なルールに縛られていませんでした。

鴨川と東山の丘の間にある、都市の東側の地域で最も早く、最もダイナミックな洛外コミュニティが形成されました。そこでは、広く緩やかに傾斜した地形が高く乾燥していました。また、都と東方を結ぶ東海道へのアクセスも簡単でした。日本最大の文学古典『源氏物語』に書かれたように、土地の名士は、東部の丘に沿って、特に鳥辺野と呼ばれる場所で死者を火葬されるのがこのまれるようになりました。またかれらは、次の3世紀にわたって繁栄した寺院の創設を後援しました。今日、東山は世界で最も多くの仏教寺院が集まる場所の一つです。

東山は、12世紀後半に重要な武力の中心になりました。貴族の武将である平清盛（1118-1181）は1167年に太政大臣になった後、六原光寺からそれほど遠くない六原に大規模な武士の飛び地を設立しました。南に、彼は後白河上皇（1127-1192）のための法住寺の建造を後援しました。元の法住寺の複合施設は、鴨川の東側の七条道路沿いの14ヘクタールをはるかに超えていました。有名な三十三間堂など、いくつかの仏教寺院が含まれていました。後白河上皇は、彼の地位を正当化するために新しい種類の支配権の政治的、経済的、宗教的基盤として機能するように法住寺の複合体を委託しました。

東山地域は、豊臣秀吉（1537-1598）のおしめない後援により、16世紀後半にさらに爆発的な発展を経験しました。秀吉は1世紀以上の戦争の後、都の再建に着手しました。彼の最も野心的な計画は、はるかに七条と東山の交差点に近い方広寺に焦点を当てていました。そこで、彼は1589年に仏殿を完成させました。彼は近くの妙法院、智積院、三十三間堂の寺院に資金を注ぎ、広範にわたる再建とそれらの財産の大規模な寺院ネットワークへのリンクを可能にしました。

東山は、1596年の地震による方広寺の破壊と2年後の秀吉の死の後、比較的静かな段階に入りました。しかし、19世紀に天皇の東京への移住が京都の政治経済的な指導者に拍車をかけ、積極的な都市近代化キャンペーンを開始したときに、開発が再び始まりました。東山は、急速に近代化された国の中で都市の評価を高めることを目的とした大規模なプロジェクトの出現により、再び行動を起こしました。これらのプロジェクトの中で最も重要なのは、

平安神宮、円山公園、京都国立博物館です。後者は現在、方広寺の大仏殿の敷地に部分的に立っています。博物館の新しい棟の入り口は、三十三間堂の南の大門に対応する軸に沿って並んでいます。再び、東山のモニュメントは、8 世紀の京都の基礎にまでさかのぼる空間、場所、意味の交差によって結び付けられています。